精霊術師と三人の魔導師たちと

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊術師と三人の魔導師たちと

【Ｎコード】
Ｎ７００９Ｘ

【作者名】
銀

【あらすじ】
身体が縮んだ。コナン君現象だと……！？　しかも魔力も無くなっただと……！？　あと一歩で局員全員の弱みを握れたというのに――……まあ、いいか。とりあえず金品掻っ攫って新しい人生を謳歌しよう。そんな物語。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

精霊術に関しては色々な作品の設定を拝借しておりますので、「ん？　見たことあるぜよ」と思った方、どうか暖かい目で見てやってください。

Prologue

パリッ

「やっぱりポテチは元祖、うす塩味に決まってるね」

それが遠くで広がるファンタジックな光景を見ながらの第一印象だった。しっかり咀嚼しながら、きっとこの思いは最後まで一貫して頭に残るだろうと思ったりもする。それは、そのファンタジックな光景が俺にとって見慣れた光景の一つでしかないから。

町から数キロ離れた海面に、光芒は傍若無人に鎮座していた。周囲との調和を完全に無視したその光景は、町の住民が見れば空いた口は塞がらない代物である。

いくら結界が張ってあるとはいえ、この管理外世界――地球で魔法を乱舞させるなんて正気の沙汰とは思えない。管理局的にありだとしても、この国の法律は余裕で破っている。

自分たちの法さえ破ってなければ……それでいいのかねぇ。

その個人の価値を優先する振る舞いに、思わずこう言いたくなる――いいぞ。もっとやれ！

繁華街の高層ビル、その屋上のフェンスに腰を掛ける俺はクスリと笑って、中空に乗るポテチさんを風の精霊を使って口に運ぶ。そんでもって膝元に座る緋菜の頭を撫でる。

綿飴のようにふわふわしたウェーブを描く金色の長髪は指を走らせるとサラリと流れる。俺と同じく正面を向く緋菜の顔は伺えないが、心地よさそうに大きな碧眼を細めているのはまる分かりだった。

緋菜に向けた視線を海面に引き戻す。

風の精霊を使って”見て”いるから自分の目は必要ないのだが、気持ち的な問題だ。

海面では、常人ごときが理解できる範疇を遥かに超えた非常識が展開されている。

例えるなら、怪獣大決戦。一方は魔力と物理の複合四層式の防衛プログラムを持つ触手やらなんやらがうようよしている本物の怪獣。肉眼で見れば背筋が凍り付きそうなくらいに不気味だ。どれくらい不気味かというと……やっべ、これマジやべぇ、どれくらいやばいかというと、マジやべぇっスわ、マジで――くらいだな！

もう一方は人間。数はいっぱい。お約束だな。

だがお約束は数だけ。人間側は”質より量”であるべきなのに、

「人間側、強っ」

こういう場合はBランクの魔導師が多数と少数のAランクであろうに、一人一人がAAAランクは卑怯だ。視聴率の不興を買うだけだ。ただのリンチだ。怪獣乙な展開が見え見えじゃないか。

心情は怪獣の味方をしつつ、だからといって介入するつもりもな

く傍観に徹するのは行く意味がないから。俺一人が怪獣の味方をしてもあの戦力差では勝敗が目に見えている。しかも小さくなり、かつ魔力が切れているこの身体じゃ、ねぇ。

状況は終始人間側の有利にあった。

数年前に顔を合わせたことのある守護騎士たちに、彼女達に一歩譲るものの充分な実力を兼ね備えたおよそこの小さくなった身体と同年齢の少女たち。

だが、それ以上に目を引くのは、

「化け物だな」

やはり少女たちと同年齢の少年二人。

あれはなんだ？

人間の魔力保有臨界点を明らかに超えている。放たれる砲撃が空間に干渉するほどの威力は、現代の技術で作成されるデバイスでは不可能だ。

ロストロギア。思い付くキーワードはこれと人造魔導師しかないのだが、これまたロストロギアは個人の人間の扱える代物ではないし、人造魔導師も現代の科学ではあそこまで強化はできない。

その二人がトドメとばかりに叫んだ巨砲で怪獣は完全消滅した。

「……」

邪気。そう邪気のようなものを感じる。あの二人からは底知れない何かが潜んでいる。そう思うざるを得ない猜疑心が粘土のようにへばり付いて離れない。

今こそ晴れやかな笑顔で勝利の余韻に浸っているものの、渦巻く邪気のようなものが俺の不信感を募らせる。

「……おにいちゃ？」

「！　ん、ごめん緋菜。ちょっと不気味なものを見てね」

「んー？」

緋菜に風の精霊は扱えないので、あの光景を見ることは不可能。星空を見上げているだけだったが、俺の感情の波が揺れたことに気付いたのだ。

義理でも、流石我が妹！

「何でもないよ」

緋菜をギュッと抱きしめて俺はゆっくり飛翔してその場から離れる。

光を屈折させて姿を消してはいるが、あの分けワカメな二人が気付かない理由にはならない。

未だ風の精霊が送る映像を脳内で見ながら、俺は結界の外へと向かった。

Main Event? 1（前書き）

フッ。シリアスしか書けねーぜ。

クレイ（いけしゃあしゃあと）

Main Event? 1

あれから五年と半年。

六年前、ちょっとした出来事があって身体が縮んでしまったが、時を経るごとにきちんと成長をしてくれたのは重畳だ。

肉体年齢はおよそ十五歳。仕方ないから日本の法に乗っ取って義務教育を受けている俺は現在中学三年生にある。学業というのは今まで修めたことがなかったから最初は新鮮だったが、如何せん実際に生きた年齢が他の連中とは違う。精神年齢の違いから小学生時代は本当に辛かった。皆、馬鹿ばっかだもん。

だがその苦痛も中三になると薄れていく。どこか俯瞰して見ているものだからクラスメイトたちの成長を知ると少し感慨深い気もしない。進路の違いとクラス分けで、その数は十にも満たないが。

俺の選んだ中学は、これ以上ないくらいハズレだった。適当に学校名の記したサイコロを緋菜と一緒に「なにが出るかな？　なにが出るかな？」とご機嫌に転がしたのだが、まあハズレだった。幸運値が緋菜と違ってマイナスにある俺が一緒に転がしたのが間違いだった。

私立聖祥大付属中学校。私立なんて、ただでさえ学費が馬鹿にならないのに、その上、彼らがいるのだ。

五年半前に風の精霊で見たあの分けワカメども。

クラスが違う。それは唯一の救いだったと思う。あの二人を視界に入れると、冗談抜きで不快感が露になってしまうのだ。

生理的に受け付けないのだろう。

まあ、そんな話は置いといて、

「ハヤテさんよ、ハヤテさんよ」

「なんや、と言わせてもらう前に敢えて言わせてもらうで」

「グラハム・１００エーカーである、と？」

「私はキミに心奪われた女や！　プーさん――って、とんでもないコラボが発生しとる！？」

「どっちがいいと思う？　プーさんが修羅の道を求め、操縦桿を操って『はじめましてだね、ガンダム～！』っていうのと、ハムさんが森でひたすら蜂蜜をペロペロするの」

「どっちも映像が衝撃的過ぎるわ。プーさんの姿で、プーさんの声で『僕はキミという存在に心奪われた熊だよ～』って、どう考えても、その存在は蜂蜜やろ」

「プーさん・スペシャル。空中で蜂蜜をペロペロ」

「そこまでいったら機体に乗る意味ないやん。でも、あの世界にプーさんがハムさん的立ち位置におったら腹筋崩壊は確実やな」

「古来のガンダムファンからは、これ以上ない批判を受けるだろうが」

「私は支持するで。笑いは文化や」

「さすが関西弁を扱うだけあって笑いにお熱だな。半端な関西弁だが」

「それは一人称が『私』やからか？　そうなんやろ。だけど甘い。甘いでクレイくん（キリッ）」

「なるほど、少しでも個性を主張して出番を獲得するためか」

「ああん、言っちゃ駄目や。これから私がちょこっと盛り合わせしたストーリーの独白が始まるはずやったのに」

「どうせ、その盛り合わせは核を担う米が数粒しかないだろうが。米三粒、肉一切れ、キャベツ山盛り」

「チッ。バレとったか」

「仕方ない。俺が完璧な独白を見せてやろう。ストーリーは我が最愛なる妹、緋菜について。起承転結――よし、結は省こう」

「はい、アウトー。結を省くって永遠と語るつもりかいアンタ」

「二十四時間じゃ全然足りない自信はある！」

「相も変わらず物凄いシスコンっぷりやな」

「フフ、キング　オブ　シスコンと呼んでくれて構わない。」
「大変やな緋菜ちゃんも」
「大丈夫。あの子はキング　オブ　ブラコンだから」
「ブラジャーコンプレックス？」
「ブチ殺す」
「ちょ、冗談やって！　そんなマジな目にならんとってや！　瞳からハイライトが消えとるで！　ブラザーコンプレックスやろッ！」
「命拾いしたな。あと二秒遅ければ真夜中に八神家のインターホンを連打しにいくところだった」
「地味に、いや、完全に最悪な嫌がらせや！　そんなことされたら私もピンポンダッシュがしたくなるやんか！」
「あれは中々スリルがあったぞ。押したと同時に家主が偶然扉を開けたらどうしよう、そんな緊迫感のある遊びはそうそう見付かりはしない。若い頃は、軒並みすべてを猛ダッシュしながら押したもんだ。やりすぎて最終的に武器を持ち出した家もあったが」
「な、なんと羨ましいことを……！　くっ、私もやってみたかったけど、昔は車椅子のお世話になっとったから」
「車椅子じゃ捕まるわな。だが、ハヤテよ。まだ諦めるには早いだろ」
「ま、まさかクレイくん……！」

「きっと、まだいける年齢だ」

「――！　そうやな！　諦めたらそこで試合終了やもんな――なんて言うわけないやろっ！　ピンポンダッシュが許されるんは小学校低学年までや！」

「見てみたかったんだがな。中三の女がピンポンダッシュ……。あいたたたた。俺、居合わせたら絶対写真とって翌日の掲示板に貼り付けるわ」

「私のすべてが地に堕ちる瞬間やな。分かります。ちなみに最初に言おう思うたけど、私の名前は確かにはやてや。けどカタカナ変換はいただけん。どこぞの完璧超人の借金執事と誤解されてまう」

「そうだな。口調的にも中の人的にも相沢――」

「そこまで！　ネタバレは芸人の心をデストロイヤーする悪魔の囁きや。」

「プーさんの囁き……だと……！？」

「悪魔や。『あ、熊』なんて無理あるやろ」

「諦めたらそこで試合終了なんだぞ」

「本音は？」

「諦めたら敵チームのドリンク剤に下剤をぶち込め」

「それ無理ゲーやろ」

「同じ形状をした水筒をこちら側で用意して、足が滑ったっつって敵陣にぶち込めばミッションコンプリート。後半戦の敵はケツに力入れて踏ん張ってるから、ソッと腹を押してやれば爆発は起きる」

「鬼畜すぎる。最凶最悪の監督や」

「俺はただ、限界まで溜め込んで外に出たいと苦しんでいる彼らに協力しただけだ。ボカーンッ！」

「そのボカーンの意味は……」

「ん、口答では、とても言えたもんじゃない。だって厨二に隣接しているお年頃だもの」

「まあ、厨二に隣接しとるお年頃やなくとも口答で言えたもんやないけどなぁ」

「ならば敢えて俺が言おう」

「なんでやねん」

ビシッとはやての鋭いツッコミが決まる。

「今日もやるじゃないか、はやて。さすが関西弁を扱うだけのことはある」

「クレイくんも、ナイスボケや。最後の最後で基礎の『なんでやねん』を引き出すその話術。策士やな」

そう言うと俺たちはくっく、と笑う。

この話題に逡巡もなしについて来れるのは、マニアックなネタと頭の回転力を兼ね備えるはやてしかいないだろう。

どんな無茶難題の振りをかましても打てば響くように返ってくる。彼女との出会いだけがこの学園に来た唯一の利点と言えるかもしれない。

あの五年半前の出来事の該当者、あの二人の知人であったため初めは敬遠していたが、同じクラス、席が隣になって触れ合ってみると見事に意気投合。やばいくらいに楽しい。

「はやてちゃんと時神くん、本当に仲がいいね」

と、控えめな声がはやての後ろの席から入る。

「当たり前や、すずかちゃん。クレイくんは将来の相方候補生やからな」

「候補生かよ」

別にショックでもなんでもないが、ツッコミは必要なので入れてみた。

展開についていけず、ずっと聞き手に回っていた少女は月村すずか。深い紫色の波を打った長髪、それに乗る白いカチューシャ。アメジストの瞳。

容姿、発育共に非の打ち所のない美少女だ。多分、学園で一番俺

の好きなタイプだと思う。はやても美少女といえば美少女だが、身体の発育は、……乙、だ。

「なんや、今、不愉快な電波を受信したで」

「木の精だ」

「字が違わないかな？」

「月村、これはワザとだ。はやて、続けるがいい」

「……なんか納得いかんけど、まぁ流しといたる。この海鳴市ならクレイくんは指折りの素養の持ち主やけど、関西にはそれすらも越える漫才師がごまんとおるんやで。街角のおばちゃんですら並々ならぬ力量を持っておる」

「誇張しすぎじゃないか？」

「かー！　これやから田舎もんは」

なんか凄い残念なものを見るような目をされた。非常に不愉快だ。ぶん殴ってやろうか。

「というかお前もその田舎もんだろうが」

「心の話をしとる」

「まあ、ウザい☆」

「黙ってきけ♪」

ニッコリと笑う俺とはやてのソレはメンチの切り合いと同じ意味であった。

「クレイくんとすずかちゃんは、もっとバラエティ番組を見るべきや！」

「え！？　私も？」

反応したのは月村だった。

「俺はともかく、月村は確かにもっとレパートリーを増やすべきだな」

「私……結構、本読んでるよ」

それは休み時間の行動から察するが、

「違うねん！　今はそういう話をしてるんちゃうねん！　ええか、すずかちゃん。これから先、波のように押し寄せる登場人物に負けんだけのインパクトを習得せんと、空気キャラなんて悲惨なポジションに左遷されてしまうんや。

例え名前が出て来たとしても『あ～、そんな奴いたな』ってあっさり幕を降ろされるんや！　一発芸人と同じ末路を辿ることになるんやで！？　それでいいんかすずかちゃん！」

はやての演説じみた説教が熱を帯びる。

穏やか、優しい、大人しい、読書好き……確かに、いつからか扱

いが難しくなって脇役に左遷されそうなのは同感だがな。

「押し寄せる登場人物……？」

「私らはフィクションやから当たり前や！」

「はやて、それは危険だ。自重しろ」

「なに甘ったれたこと言っとるん！？　媚びず、退かず――自重せず！！　はやて仕様お笑い三原則を忘れたんか！　あの夕日に掲げ誓ったコンビの絆をッ！！」

「候補生って言ってただろお前。漫才は終わったんだ、さっさと正気に戻れ」

「いやや！　今日こそはクレイくんに関西のおばちゃんの強力さを！　すずかちゃんに空気キャラにならんための秘技を叩き込んだる！」

完全に熱血スイッチがオンになったはやては周囲の目を気にせず、勢いよく立ち上がって握り拳を作った。

置いてきぼりの俺と月村は何とも言えない苦い顔をする。これから起こる出来事が手に取るように分かってしまった。

このままではホームルームが始まっても語り続けそうだ。

仕方ない。

「まずは、重症のすずかちゃんからやぁ！」

ガサゴソ（はやての机、物色）

「ええ！？」

タータラ、ララララン♪（ハリセンＧｅｔだぜ）

「すずかちゃんのインパクト上昇には、その豊満な肉体を駆使する必要があるんや」

はい、せーの

「とりあえず、まずは脱いでみよ――」

バッチコォォオオーーンッ！！！

「ぎゃあああぁぁぁあああああああ！！？」

はやて専用ハリセンＭｋ－２と太字で書かれたハリセンで思い切り顔面をシバく。頭ではない。より強い苦痛を求めての行動である。

回避も防御も間に合わないはやては盛大に後ろへずっこけた。痛い痛いとゴロゴロ転げ回る。

「悪は去った」

「あ、ありがとう……？」

血糊を払い退けるような動作をしてハリセン（戦利品）を自分の机に仕舞ったところでスピーカーからチャイムの音が鳴りはじめた。

「目が！　目がぁああ！？」

なんて言う何処ぞのムスカ大佐はスルー。いつまでネタに走るつもりなんだ。

あっさりはやてを見捨て、他人のふりをして他所を向いていると、不意に教室のドアが開いた。

カツ、カツ、カツ、と凛々しい足音を立てて現れた一人の男。一見すると青年実業家を思わせる風貌をしている。くせっ毛の金髪に、しかしまだ少年のあどけなさが残る面立ち。

着こなしている服は――軍服。

「諸君、朝の挨拶。則ち、おはようという言葉をこの私、グラハム・エーカーが慎んで贈らせてもらおう」

前時代がかった口調を好み、その行動も基本的ストイックそのものな古典の教師兼、我らがクラスの担任は『サムライ』や『武士道』という言葉がすんなりと馴染む……ような態度を取っている。

俺は斜め後ろの席に座り、苦笑する月村にコソッと囁く。

「あれが分かりやすい、主役級争奪戦で長生きしそうなタイプだ」

「な、なるほど。確かに変わったもんね。山田先生」

その言葉にピクッ山田は耳聡く反応した。

「月村よ！　私はグラハム・エーカーと名乗ったはずだ！　気を付けてもらおう！」

「す、すみません！　……でも、山田太郎先生ですよね？」

「グ・ラ・ハ・ム・エ・ー・カ・ー！！」

「山田だろうが。００が放送された途端、髪型に髪の色、口調に性格、体つきまで散々いじくり回して。山田太郎のくせに、グラハム・エーカーって、影響受けすぎにもほどがあんだろ」

「時神、お前もか！　いつまでも仮の名前で呼びおって」

「うん、仮が逆だから」

「ええい、このままでは埒外あかん！」

お前があかなくさせているんだ。

山田は険しい表情で一歩下がると教卓に乗せた帳面を開く。

「トランザム（※出席確認を取る）！」

馬鹿がいる。阿保がいる。厨二がいる。批判きそうだ。

適当な発言ばかりするものだから一々翻訳をしなければ収集が付かない。

「少年！　少年！　少年！」

ほら、意味が分からない。これが出席確認というのだから、きっと彼は終わっているのだ。主に頭が。

クラスメイトたちも、もう慣れたのか出席番号順に「はい」「はーい」とテンポよく返事をしている。きっと、この一年の時を過ごし卒業して新たな地へ飛び立つ彼らは常人ならざる順応性を開花させているに違いない。担任の頭が弱いから。

「痛た……。ようやくムスカも収まってきたわ」

今まで山田にも構ってもらえず、いい加減淋しかったのか、はやては起き上がり席に着く。

……。

「またシバかれたいか、はやて」

伝わる。ムスカも収まってきた、で伝わるのだが、いつまでもギャグに突っ走って変な表現をするのはいただけない。ただでさえ山田という馬鹿がいるのに、はやてという阿保まで混ざったら、教室は永遠にカオスだ。

「冗談や。ようやく私の熱きパトスも収まってきた」

「……まぁ、よしとしよう」

疑心は解けなかったが、ハリセンを炸裂させるのはやめておく。

「ハム先生は今日も元気やな～」

「うっざいだけだ」

溜め息と共に頬杖を着く。

「それも分かるけど、それ以上に楽しくないか？　あんな濃い教師は他におらんと思うで」

「あんなものがちらほらいてたまるか」

学校に二人もいれば崩壊は免れない。

「少女！　少女！　少女！」と連呼して、ようやくブッ壊れた出席確認が終わる。平静を保つクラスメイトたち。本当にこいつちの順応性の高さには感心すらも覚えてしまう。

山田（絶対にグラハムなんて呼んでやらん）は出席名簿を畳み、「全員出席だな」と満足げに頷くと教卓に両手を着いて生徒を眺める。

「諸君、この私、グラハム・エーカーが勤める今日の体育は二組の時間割変更に従い、彼らと合同となる」

……えー。

山田から齎された言葉は俺の気力を根こそぎ奪ってしまう残酷なものだった。ざけんな、と声を張り上げる気も湧かないくらい、とんでもない脱力感に襲われる。

「なのはちゃんらのクラスやな」

「楽しみだね」

ああ、お気楽なはやてと月村が羨ましい。中空に『♪』なんて浮かしやがって。はやてはどう考えても『禁』だろうが。

「なんや、また不愉快な電波が」

「木の精だ」

「二度ネタはタブーや」

「鬼の精だ」

「よし」

「よし、なのかなこれは？」

「すずかちゃん。世の中すべてのもんを受け止めるなんてできへんのやで。必要性のあるもんだけを見抜いて生きる――それが大人というもんや」

「格好いい発言だけど、使いところのせいで素直に頷けないよ」

「ぼーややからな」

クールにフッと笑うはやてはハリセンでやんわりと叩いておいた。ツッコミ待ちだったし、俺も少しでもストレス発散をしておきたか

ったから円満に終わる。

しかし鬱々とした気持ちが消えることはない。

それもそのはず。二組には俺が敬遠している二人が所属しているのだ。

確か……天之川　刹那とゼロ・レオンハルトだったか。

なんとも厨二臭い名前である。

ちなみに俺は、昔日本人の女性に引き取られて、時神の日本姓を得たので名前のクレイに漢字はない。馴染む漢字が存在しない。

それはともかくこの二人と対面するなんて虫酸が走る。食わず嫌いならぬ会わず嫌い、だが、そう思っても仕方ないほどあの二人からは異質な空気を感じる。

山田にそれだけは、と懇願したいのだが、山田にそんな言葉を口にするのも虫酸が走る。

「教師として公平なジャッジをしなければならないが、担任として敢えて言わせてもらおう！　必ず勝利するのだ！」

死ねばいいのに。

決め顔で激励を飛ばす馬鹿に本気の殺意を抱いた。

風の精霊を使役すれば、窓から駆け抜ける春の陽気なそよ風一つでヤツの首を”ポロリもあるよ”にできるのだが。

仕方ない。サボるか。

「時神、　サボりとは関心できんな」

「……山田」

なんで、気付いた？

「心眼は鍛えている。そして、私は山田などという名ではなく、グラハ――」

「あー、分かった分かった。ハム先生。これでいいだろ」

「うむ！」

「いいんやな」

この馬鹿なら体育の時その場にいなかったら校内放送や自分の手で探し出したりだって、平然とやりそうだ。ていうか、絶対やる。

そんな迷惑なことをされ、なおそんなことで有名になるなんて、いよいよハムを微塵切りにしなければいけなくなる。

「……ちゃんと授業に出ればいいんだろ」

「分かればよい」

上から目線……！　このハム野郎……！

「クレイくん、どうどう」

「ああ、分かっていよはやて……！　やるなら夜道で背後から、だろ。上手くやるさ」

暗殺か。ピンポンダッシュで培った、人込みや自然の一部と化して行動する能力を使えば余裕だな。

「そうそう、抜き足差し足忍び足――グサァッ！　って阿呆ッ。そんなこと言うとらへん！」

スパン！

奪ったハリセンを取り戻したはやてが俺の頭に一閃。

「大体、ハム先生をやって警察のお世話になるなんて、損失以外のなにもんでもないで」

「それもそうだな」

殺す価値もないとは、まさにこのことだ。

「お前たち、本人を前にいい度胸だな」

おっと聞こえていたか。

「まあ、多少の暴言は認めよう。私も大人だからな」

「アリガトウゴザイマース（棒読み）」

俺も大人だから多めに見てやろう。良かったな。

ようやくハムは俺から視線を外し、何か言おうとしたが、腕時計で時間を確認すると、

「もう、こんな時間か。今日は一時間目から私は授業ある。連絡事項は述べたからホームルームは終わらせていただく」

有無を言わさず一方的にまくし立てると、ハムは淡々と教卓に置いた所持品を回収して外に出て、

「しからば」

ピシャリと教室のドアを閉めた。

数秒間、いたたまれない空気が教室を支配したが、時を経るに連れて活気を取り戻す。

「あの男のワンマンっぷりもあそこまでいけば逆に清々しいな」

「ゴーイング　マイ　ウェイやもんな。これは当分、主役級の登場は確保されたも同然や」

俺としては是非とも遠慮したいのだが……

「ここぞって時に現れそうだよな」

「いいとこどりか、空気をブチ壊すかの二択やな」

どっちにしろ現場にいた者にとってはデメリットでしかない。風

の精霊で常に監視でもしておくべきか？

いっそ事件でも起きて最初の被害者にでもなってくれれば俺も喜色満面で葬式に出席できるのだが。

「それよりも――」

はやては怒気を孕んだ低い声を上げた。

Main Event? 2

「すずかちゃん！」

その矛先は月村へ向けられた。

唐突に怒鳴られた月村は何が何だか分からず、目を白黒されている。

チラッとなぜ怒られたか理由を問う視線を向けてきたが、残念ながら俺もはやての思考回路は理解できない。静かに首を振るうだけだ。

「どうしてさっきのやりとりに一言ていどしか喋らんかったのや！」

「え……ええ！？」

……ああ、なるほど。と、それだけで理解してしまった俺もなかなか末期かもしれない。

「ハム先生が来る前に言ったばかりやんか。波のように押し寄せる登場人物に負けんだけのインパクトがないと空気キャラへと左遷されてしまうって。今のすずかちゃんはまさしく空気やったと言えるで！」

まあ、そういうやつって結構いるんだがな。何か意見を言い合ったりはせず、輪に入ってただ聞き役に徹するタイプは。

物語に必要かどうかと聞かれると、安易には頷けないが。

「こうやって私に怒られてスポットライトを浴びるんもあかん。自然の流れで会話に参加して、シャキンと心地好い言葉を放てるようにならんと、『すずか消えたｗｗ』なんて言われるで！　それでいいんかＤｅａｒ　Ｆｒｉｅｎｄ！？」

「なんで英語？」

打てば響くような切り返しのチャンスを与えたつもりなんだろうが、しまった。先に俺が言ってしまった。

だが、はやては挫けない。

「よし、すずかちゃん。今のクレイくんのツッコミより一層キレのあるツッコミを見せるんや。ハリセンも貸したる」

半ば押し付けるようにはやてはハリセンを握らせる。

とんでもない無茶ぶりに月村は視線を右往左往させて激しい動揺を見せる。はやてのお笑い魂の熱量を知るクラスメイトたちは冥福を祈りながら、しかし被害が及ばないようにいつでも逃走を計れる距離を取っていた。薄情な連中である。

仕方ないから俺は抜き足ではやての背後に回って、月村と視線を合わせた。

ザ・アイコンタクト。

（ク、クレイくん。どうしたらいいの！？）

（落ち着け月村）

（でもはやてちゃん。鬼のような形相をこっちに向けてくるんだよ！？　こんなはやてちゃん見たことないよ！）

（お前の心配をしているからだよ）

（え？　私の？）

（そうだ。親友であるお前が空気となっていつの間にかいてもいなくても同じような存在になることが我慢ならないんだよ。立場を逆転させて考えてみろ。お前は嫌じゃないか？）

（……嫌。凄く嫌だよ、そんなの）

（だろ。だからはやてはどんな手段を使ってでも、変な印象を抱かれようとも、お前に不安や疎外感を与えさせたりなんてしたくないんだ）

（でも……私、どうすれば）

（ツッコミを入れるんだ。今のはやてはそれしか望んでいない。幸いお前には笑いのアルテマウェポンが託されているじゃないか）

（ぁ……）

（はやての期待に応えるんだ。さあ、思いきり振り上げろ）

（思い切り……）

（手加減は侮辱だ。思いきり振り上げ、思いきり振り下ろせ）

（――分かったよ。私、やってみる！）

意を決した月村の顔に最早、迷いはない。

自ら進む道を決めた、強者の瞳をしている。その姿たるはまさに豪華絢爛の凛々しき騎士。

一皮剥けた彼女は躊躇うことなくアルテマウェポンを振り上げる。

教室の騒音が嘘のように静まり返り、無音になったのは俺がこの光景に夢中になっていたからだろうか。こんな空気、久々だ。成長した人間が見せるオーラを前に、俺は自然と口元が緩んでいた。

もしかするとはやてもそんな表情を浮かべているかもしれない。

成長したすずかの放つ一閃を真っ向から立ち向かうつもりか、一切動く気配はない。

そして、時は動く。

高々と振り上げたアルテマウェポンが手加減なく振り下ろされたのだ。

月村は叫ぶ！

「な、なんでやねん！！」

この時、俺とはやてはすっかり油断していた。

月村すずかという人間の身体能力はとても高い。女性特有の繊細さと、その穏やかな性格からは想像もつかない豪胆さを兼ね備えた彼女は体育において無敗の強さを誇り、男子すら屠り、その名を運動部へ知らしめているのだ。

その実力は俺もはやても知っている――そう思っていたが、どうやら月村は体育の授業ごときで真の力を発揮することは不可能だったのだ。

ズゴォオオーーン！！！

「は？」

目の前の状況が理解の範疇を越えた俺は、らしくない素っ頓狂な声を上げてしまった。

ズゴォオオーーン？　何だ、この音は。ハリセンで叩いた音ってせいぜい、バシッだろ？　ズゴォオオーーンって必殺技が決まったような音は立たないだろ？

本当に、教室が水を打ったように静まり返る。誰もが唖然として硬直していた。

はやての頭が消えたのだ。ハリセンが振り下ろされたと同時に、まるで跳ね飛ばされてしまったように消えたのだ。

「はやて……？」

机にガクンと身体を垂らせるはやてはピクリとも動かない。まるで死体のように、全身から力が抜け落ちていた。

冷や汗を流しつつ、俺ははやての顔を覗く。

「うわ……」

ハリセンが直撃したであろう後頭部と、机に打ち付けたであろう額に、大きな瘤ができていた。少し離れた位置からでも視認できるくらいポッコリと瘤ができていたのだ。

これには同情を感じざるおえない。ただ勢いとノリだけでモノを言っていたはやてに困らされていた月村を助けるべく、ちょっと脚色付けてはやてを美化して事なきを得ようとしたのだが、まさかの結果。

俺は教室に掛けられた時計で時間を確認する。

「午前八時四十六分……ご臨終です」

「はやてちゃぁあああん！！？」

月村の悲痛な叫びが胸に響いたのだった。まる。

◇◆◇◆◇◆◇

うぁあああ……。

声にならない苦痛を上げた俺はグッタリと木に背中を預けていた。

現在の時刻、十二時。ちょうど日がてっぺんに昇る時間帯に、俺はグランドの隅の木陰で休んでいた。

四限目は体育だ。

視線を明るい前方に向ければ男子はサッカーを、女子はグループごとに様々な運動をしている。

普段は男子がグランドの場合女子は体育館、と場所を交互に変えて行っているのだが、どうやら今日は女子の体育を担当する教師が体調を崩して休んでいるのでハムが女子も纏めて監督することになったらしい。二組との合同のワケもここだろう。

ハムはサッカーの審判に忙しく、男女の面倒を両立するのは難しいため女子には自由行動を与えている。

そのため、

「「「キャー！　天之川くん、レオンハルトくーん！！」」」

なんて女子の金切り声が晴天を突き抜けるまでに響いていた。

春の寒気は去ったというのに、その悲鳴が三半規管を揺らし、背筋を凍り付かせる。この距離でここまで不愉快な気分になるのだから、サッカーをプレイする男子には堪ったものではない。

天之川、レオンハルト。

女子の視線を釘付けにしている二人は、額に汗を浮かべて爽やかな笑顔で活発に動き回っていた。

紫色の切れ目に魔性の輝きを乗せる鴉の濡れ場色の髪をした長身痩躯の男が天之川刹那。

紅と蒼。対を為す瞳を持ち、太陽のように光り輝く金髪の男がゼロ・レオンハルト。

二人とも、まあびっくりするくらい均整の取れた顔立ちをしている。絶世の二文字がついても恥ずかしくないくらい美形だった。

男から見ても、女子が黄色い声を上げて目をハートにするのは頷けた。

俺が敬遠する二人。

現在、この二人のせいで体調が芳しくないのだ。

始めて肉眼でしっかりと捉えると、やはり異質な力を感じた。人

ならざるもの、しかもよいといえない力。それが原因か世界を創造したとされる精霊たちが恐れをなして精霊術師である俺に群がってきたのだ。

空気を取り込んで吐き出すことを繰り返して生物が生きるように、精霊も取り込めば何かしらの形で吐き出さないと精霊酔いを起こしてしまう。

あの二人に近付けば近付くほど精霊たちは助けを求めて精霊を取り込む回路を持つ俺に入り込んでくる。集合して出席確認を取っている時は安易に精霊を使役もできないから吐き出せず、ひたすら身体の中に溜め続けるだけだった。よって俺は精霊酔いを起こして授業開始早々にダウンしてしまったのだ。

誰からも距離を取って、ゆっくりと風の精霊を使役し、周囲にそよ風を発生させているから激しい頭痛と吐き気はだいぶ収まったのだが、まだまだ全快にはほど遠い。

「気持ち悪い……。あの二人、いっそ斬り刻むか？」

そうすれば無駄に神経を擦り減らす必要もなくなり、輝かしい学校生活が送れる。

目を細めて殺気を飛ばしてみるものの、反応はいっさいない。鈍いのか、サッカーに集中しているのか。

夜道で背後から。いや、背後からじゃない。夜道で数百メートル離れたところから……――ザクッ！　ザクザクザクッ！！　と挽き肉にしてしまえば完全犯罪の誕生だ。

大丈夫。俺ならできる。ふふ、暗殺なんてゾクゾクするじゃないか。

真っ青な顔で不敵に笑っていると、近付く影が一つ。全方向に発散させていた精霊の流れを変える。

「大丈夫？　クレイくん」

「月村か」

気怠げに顔を上げる。そこには前屈みになって心配そうに見てくる月村がいた。体操服姿の彼女は身体のラインがくっきりして艶めかしい。ハーフパンツから覗く白い足は男子から多大なる視線を浴びそうだ。

しかし今の俺にそんな劣情を抱く余裕なんてない。

「体育が始まる前までは元気だったよね」

「ああ……だが時間が経つに連れて気分は下降していたが」

まだ授業が終わるまで四十分近くある。憂鬱な気分は晴れるどころか積もる一方だ。

そんな俺の隣に月村は座る。

「……いいのか？　大好きな体育だぞ」

「うん。実は私もそんな気分じゃないから」

「ふぅん」

生返事をしたのは彼女は俺と近い理由に感じたから。

月村の視線が誰に向けられていたか、気付かないわけもないが、敢えて黙殺しておく。

「で、はやてさんは大丈夫だった？」

「あは、は……。まだ保健室で寝てる」

あの凄絶なツッコミに打ちのめされたはやては至急保健室へ運ばれて、現在も気絶中のようだ。

ちょっとした悪ふざけがこんな事態を引き起こすとは面白い。月村め、とんでもない才能を秘めていたな。

「あの一撃は最高だったぞ。はやてが目を覚ませば、きっと称賛するに違いない」

「それは……喜んでいいのかな」

親友を滅っしたのだ。いい気はしないのだろう。俺なら「おう、殺す勢いで振り下ろしてやったぞ」と親指を立てれるのに。

「あ、フェイトちゃんが決める」

月村の視線は別に移っていた。

いつまでもあの二人に囚われるのも癪に障るので、俺も釣られて

見ることにする。

校舎側に構えられたバスケットゴールが二つ。それに白線でラインを書いたコートで女子がチームを複数に分けて総当たり戦に励んでいたのだ。

ちょうどプレイ中の試合に月村の友達が参加していたのだろう。月村の言葉から推察するに、それらしき人物はトリコカラーの七号球を自在に操っている長い金髪が目を引く少女だろう。

月村より若干劣る、しかし平均点は余裕で越えるバランスの取れたボディラインは一切無駄のない軽やかなステップを生み出して他を寄せ付けない速度を形成していた。

舞い踊るように、進路の妨げとなった敵を擦り抜けて跳躍。強靭な足の瞬発力と上体のバランスをを披露したジャンプは彼女を重力から解き放った。

パスッ……

右手に乗せられたバスケットボールは吸い寄せられるようにリングの中に納められる。

「ダンクシュート。さすが外国人ってところか」

何処の国かは知らないが。魔導師ゆえに鍛えているというのもダンクを可能にした一つだろう。

名は確かフェイト……

「フェイト……テス……テス……。！　テストゼロテンかっ。フェイト・テストゼロテン・ハラ……孕？」

「フェイト・T（テスタロッサ）・ハラオウンちゃん。もう、酷い間違いしすぎだよ。特に最後のは、絶対に漢字変換なんてしちゃ駄目だからねっ」

「ハラウオン？」

「ハラオウン」

フェイト・T・ハラオウンね。よし、覚えた。ん？　覚える必要あるか？　ま、覚えてしまったし、もういいか。

見事ダンクシュートを決めたハラオウンはチームから拍手喝采を受けて、照れ臭そうに頬を赤くしている。

「なるほど。弄られキャラか」

「え？」

「何でもない。って、こっち来たぞ」

視界の隅に映ったのか、ハラオウンは月村の姿を認めると小走りで向かって来た。照れ臭さがまた抜けていない紅潮した頬と満面の笑み。手を振って駆け寄って来る様は、端から見れば恋人を見つけた初々しい少女そのものだ。

月村も笑顔で返す。

「おめでとうフェイトちゃん。さっきの凄かったよ」

「ありがとう、すずか」

うお、女子臭がする。はやてからは微塵も感じられなかった女子臭がする。居心地悪ッ。ただでさえ気分悪くて行動不能なのに。

「でも、すずかが敵チームに入っていればきっと無理だったよ。今日は、何処か体調が悪いの？　保健室に行かなくて大丈夫？　私、おんぶするよ」

「うん、調子は少し良くないけど、木陰に休んでいれば大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、フェイトちゃん」

「症状が悪化したらすぐに私を呼んでね。すぐに駆け付けるから」

「うん、そうさせてもらうね」

と言ってニッコリと笑い合う美少女二人は非常に絵になるっちゃなるのだが、このお互いを気遣う優しい絆は俺の肌を粟立たせる。淀んだ俺にこの空気は辛い。

グデーッとうなだれて遂に芝生の上に倒れてしまう。なるほど。これが、顔が濡れて力が出ない現象か。

なんて一人遊びで挽回を計るも、憂鬱な気持ちは晴れない。大きな溜め息が漏れてしまう。

「あれ、キミは……？」

不意に、少しおずおずしたハラオウンの声が降って来た。

「あ……悪い。溜め息が聞こえたか？」
「気にしてないよ。え、と……」
「コルトパイソン田中だ」
「……え？」
「コルトパイソン田中」
「クレイくんっ」
怒られた。
「冗談だ。もう一回すまん。時神クレイだ。月村とはクラスメイトではやてとは一方的なお笑いコンビの候補生に挙げられている」
「あ。二組のフェイト・T・ハラオウンだよ。よろしくね」
律儀に握手を差し延べるなんて。最近の子供からは絶滅したと噂されていたのに。
素直な奴は好きだ。色んな意味で。感心しつつ差し出された手を握り返す。
「ああ。とりあえずよろしく」
悪い体調を押して、人当たりの良い笑みを小さく浮かべる。

そうしながらも、きっと関わりを持つことはないだろうと俺は踏んでいた。ハラオウンはかなり好感の持てる人柄をしているが、彼女はあの二人の所属する二組にいるのだ。同じ空間を共有するなんて想像するだけで悪寒が走るのに、二組になんて足を運べるわけがない。

「じゃあすずか。私はコートに戻るけど、具合が悪くなったらちゃんと呼んでね。もちろんクレイもだよ」

「「うん、ありがとう」」

軽快なステップでハラオウンは再び試合へと戻っていく。

「いい子だよね、フェイトちゃん」

「そーだな」

初対面の男子にこの優しさ……。罪作りな女になりそうだ。

まあ、それはそうとして。

「悪い月村。俺かなり限界。寝るわ」

寝ていても精霊の放出は可能だから随分前から取り組もうとしていたものだ。芝生じゃ安眠できそうにないが、この苦行を味わい続けることに比べたら軽いもんだ。

「なら私の膝、使う？」

すずかは正座して膝を開けた。

「いいのか？」

「少し恥ずかしいけど……クレイくん、本当に具合悪いでしょ。だから、良かったら使って」

見れば月村の顔は少し紅潮していた。

男子に膝枕をするなんて今まで一度足りともしたことはないのだろう。初々しさを感じる。

普通の男なら、同様に顔を赤くしてあわあわと慌てふためくが、俺はそんな常人と掛け離れた存在だ。

「じゃあ、お構いなく」

瞬時決断。

言葉通り、いっさいの躊躇なしに月村の膝に頭を乗せる。柔らかく、温かな感触が後頭部に伝わった。

そういえば膝枕って緋菜によくしているけど、されるのって数十年ぶりだな。

ソッと手の平が頭に添えられて髪を優しく梳かれる心地好さに負けて、俺の意識は闇に包まれていった。

Main Event? 2+α

綺麗な吐息を繰り返すクレイの頭を、すずかはソッと撫でてみる。

腰まで届く真っ直ぐで林檎のように朱い髪は小さく細い指の動きに合わせて波打つ。

柔らかい髪だ。すずかは率直に思う。

それに似合っている。学校生活での彼は飄々として掴みどころがなく、しかし軟派というわけでもない。が、家での彼は、妹の緋菜に対してだけは態度がコロリと変わっている。その時の彼に飄々としたものはなく、穏やかで優しい、非の打ち所のない完璧なお兄さんなのだ。数回程度だが、そんなクレイを見ればあの長髪も頷けた。より一層穏やかさを強調するためなのだ。

妹のためならなんでもする。とんでもないシスコン野郎だ。

知り合って、一ヶ月と半分くらい。

きっかけははやてだ。

新学期早々、一新されたクラスメイトの中で二人は視線が重なると雷鳴の如く衝撃的ななにかが背筋に走ったらしい。

ゾクッとではなく、ビビッと。

少女漫画的出会いに憧れる少年少女たちに言わせると、運命的な出会い。

前世はイヴとアダムのような関係だったに違いない――そう感じさせた。

赤い糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が想いを同じくするのは当然だった。

「「なるほど。ボケとツッコミを両立させる存在ですね。分かります」」

きっと前世はイヴとアダムのような――ではなく、相方だったに違いない。

笑いの糸で結ばれた、出会うべき瞬間に出会った二人が仲良くなるのは当然のことだった。

その流れで親友のすずかもクレイと親交を持ったのだ。

すずかは思う。

（きっとこの人は私の正体に気付いている）

彼女の血には僅かながらでも人間ではない存在のものが入っていた。

今その話題は無関係なので割愛しておくが、とにかくすずかはクレイが自身の正体について気付いている確信があった。

クレイは精霊術師だ。

世界を創造した逸話を持つ精霊は、魔力素と同様に個我は持たず、しかし知性と生命を持つ存在である。四大元素の風火水土の四つに分類され、常に世界に存在し続ける。しかし公の存在と認められないのは精霊が秘匿されるべき神秘的なものゆえである。

それは精霊と同じく秘匿されるべき悪しき存在を滅するため。

それは世界崩壊の可能性の一つ、科学転用を避けるため。

それは精霊を扱えるものと扱えないものの間に確執を生まないため。

クレイは扱える側にある人間だった。

霊力という、本来見えざるべきに在らぬものを見通す力が、それを可能にする。

妖魔邪霊――人の世に仇為す魔性に抵抗する力を操るもの。

霊力のある者にこそ視認できる精霊と共に魔を滅するもの。

それが精霊術師だ。

そして、不幸にもすずかは妖魔と呼ばれる存在の血が含まれている。

精霊術師が討滅すべき側の存在だったのだ。

すずかには見える。

天之川刹那とゼロ・レオンハルトという、人間とも妖魔邪霊ともいえない不可解な存在に恐怖してクレイの中に逃げ込む精霊の姿が。そして精霊酔いに苛まれ、少しずつ精霊を解き放っているクレイの行動が。

お互い知らないふりをしてただの友人として振る舞っているのは、いつのまにか暗黙の了解になっていたのかもしれない。

初めこそ警戒していたが、何も言わない、何も行動しない日々が続いてそれも氷解していた。

だから立場だけ見れば敵対関係の相手に膝枕も許せたのだ。

「好き、なのかな？」

言って、首を横に振る。

この想いはまだ、はやてたちと同様の、友へ向ける想いだ。

そう、”まだ”……。いつの日か、きっかけがあればそれも変わるかもしれない。

……ええ～、マジで～？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7009x/

精霊術師と三人の魔導師たちと

2011年10月19日03時11分発行